

泥棒とイーダ

第10回 その人、強い？

牧田真有子

佐原さばらさんがあの世へ行く気になったのは次の日曜日のことだった。

その午後、私はチカと駅二つ向うのファッションモールにいた。最初に入った店で生成りのシャツ一枚買って財力が尽きた私の買い物は五分ほどだったが、ありきたりなデザインの似合わないチカの服探しには毎度のことながらてこずった。家族連れが行き交うフロアから隔たった、ひとけの少ない階段で腰掛けて一息ついていると、異常になれなれしく声を掛けられた。彼らは大学生くらいに見えた。私たちはその場から何度も離れようとし、そのたび回りこんで彼らは誘い文句を変えた。無視しようとする、痛いほど肩を掴まれてぞんざいに振り向かされた。私は一瞬漠然とした。それから身を翻してチカと小走りに往来へ出た。彼らは私たちを追い抜いて振り返り、それだけでも名誉毀損で訴えることができそうな笑い声を立ててゆっくり歩いていった。

「その人、強い？」

チカがエスカレーターでそう訊いたとき、私は疑り深い目で吹き抜ける空間を見渡していて、返事が遅れた。

「誰のこと？」

「亜季あきのつきあってる人」

「腕うでっ節せつ以外は、ストリートに『強い』といえるかどうか」

「いいのいいの。腕うでっ節せつな意味でだけ訊いたんだから」

チカは満足そうに言った。

最寄の駅まで戻ったところで彼女と別れた。一週間分の生活費を届ける時間がいつもより遅くなると、佐原さんにはメールで伝える。返

信は『いつもお世話になります。こちらは何時でも結構ですのでどうぞよろしく願います。』と相変わらず面妖な丁寧さであった。商店街にさしかかったとき雨が降り始めた。アーケードの下を歩くうち雨脚は強まり、折り畳み傘をひらいて路地を曲がった。吹き降りのゆくてから自転車のスタンドが外される音がした。

傘を上げると、後ろ姿の俊子とじこさんがサドルにまたがるところだった。佐原さんの姿もあった。派手な飛沫しぶきの中、体を折り曲げて爆笑しているように見えた。彼のちよつとした仕草やアスファルトを叩きつける激しい雨音が組み合わさって、私に錯覚させただけだとすぐにわかった。彼は鉄骨階段を上がっていった。迷ったが、私は俊子さんの、前にも後ろにも子どもを乗せる席が取り付けられた自転車めぎして走った。

辻で自動車の横断を待っていてくれたおかげで追い着いた。私を見とめると、彼女は黙ったままふしぎな、長いため息をついた。

「よかった。佐原さんとは没交渉だって言ってたけどもうもどどおりになっただんですね」

彼女の方に傘を差し向け、自分でもどこか空々しいと思いつながら言った。さっぱりしてはいけない領域までさっぱりしてしまったような、彼女の少ない表情は、どう見ても仲直りに由来するものではない。

「アパートに行ったのは、あれ以来だよ」俊子さんは言った。

「佐原さんの生活費のことで話を？」

「いや、息子がいるっていうあの話は狂言だって、言ってきた」

「狂言？」

彼女は車が少し途切れた隙に渡ろうとした。その肘を私は攔んだ。自転車はバランスを崩してとまり、派手なクラクションが鳴り響いた。俊子さんは私を見据え、二人で角店の軒先に身を寄せた。

「でもどうして、佐原さんが知らないことを俊子さんが知ってるんですか」

「あの子は私の友達に手を出したから、なんでも筒抜けでね。ミミっていう子。ミミはひどい棄てられ方して、一時ちよつとおかしくなってる」

あの子に少しでも気の重さを味わわせてやろうとして『実は子どもを生んだ』って言ったの。でもその直後、やけで海外旅行に出たのがきっかけて国際結婚してね。家族写真と手紙が私宛に送られてきた。あれは嘘だと彼に伝えてください、って。もう何年も前」

彼女は水滴がかかるのも構わず一枚の写真を取り出した。大きな観葉植物のある室内。丸顔の女の人と金髪でグレーの目の男性が頬を寄せ合っている。化粧のない彼女がゆったりと抱いた赤ん坊は、白人の要素をより濃く受け継いだ顔立ちで、カメラの方をじっと見ている。

「佐原さんに秘密にしてたんですか」

「赤ん坊がいると聞いてからなのよ、あの子が真面目に働くようになったのは。すぐに癩癩起こす子だからどんな仕事も長続きしなかった。私を知り合いとか親戚に頼み込んで得た働き口だったときはどれだけ謝ったか。亜季ちゃんには、頭でしか理解できないと思う。あの子を生かしておくのって大変なの。利用できるものは利用しないと」

次々と質問を重ねてきた私は、急に問えなくなったが、俊子さんは答ええた。

「どうしても許せないからよ」

私はうなずいて写真を返し、佐原さんのアパートに向かった。

鍵はあいていた。だからすんなりと、壁際の懸垂器具で首を吊ろうとしている佐原さんの姿を見てしまった。私はいやというほど動転した。彼を畳の上に戻すためには、取り急ぎ彼の足が載っている脚立を蹴り飛ばせばいいだろうかと、動転したまま走り寄った。佐原さんは私を見下ろした。そして表情を変えることなくロープの輪に頭を通した。非の打ち所がないそっけなさだった。

買ったばかりのシャツはビニール袋に入れられていた。紐で引き絞った口を握りしめて、私はそれを振りかざし、佐原さんの脇腹に叩きつけた。衣類にしては手ごたえがあり、そういえば中に飲みさしのペットボトルを入れていると思ひ出したが、私は右からと左からの往復で打ちつづけた。

「何しやる！」

佐原さんは首に縄をかけたままこちらを見て怒鳴った。私はやめなかった。彼は脚立から下りるやいなや、私が反射的に体を屈めて抱え込んだ袋を奪い上げた。袋はそばの襖に投げつけられ、勢いのある乾いた音を立てた。私たちは至近距離で向き合って突っ立っていた。

「どうしたらそこまで、人をないがしろにできるの？」

私の声は奇妙に太かった。

「なんで俺の死ぬことが、お前をないがしろにすることとイコールになるんだ？」

「言ったじゃない。佐原さんの死は私にとっても瑕疵^{かし}だって、私言ったでしょう？」

「そういえば聞いた」彼は苛立たしげに言った。「確かにあれは『死ぬな』と解釈できるかもしれない。しかしお前のわがままはたいがいきいてやっただろう。一つくらい手落ちがあつたからって、」

「もう黙ってよ」

腹の底から声が出た。

「わがままを百パーきくとかさういうふざけたレベルじゃなくて、どうしてちよつとでも本気で聞いてくれないの。私は、佐原さんに守られたいとか思っていない。セツにも見抜けないつながりが、あなたとの間にあるならそれでいいんだから。なのにあなたはちよつとあの世に行つてみようとしているところで、やっぱりセツの言うことが正しいなんて、私にはありのままの佐原さんがどうしても見えないなんて、あんまりだと思ふ」

途中で脚立に腰掛けて、私の訴えが終わる時を待っていた彼は、とても暗い顔で言った。

「まあ、そう焦んなよ」

今しがた、焦って命を短縮しようとしていた人からそんなアドバイスをされ、悔しくて心臓が止まりそうになった。佐原さんは台所に立ち、からからと窓を開け、湯呑み二つを運んできてくれた。私は俊子さんの

過剰にさっぱりした表情を思った。俊子さんに復讐されるだけの裏切り方を彼はしたのだ。ミミという女の人にも、そうやって懲らしめられるだけのことをした。この人はひとの気持ちなんて考えない。自分の気持ちすら考えないのだから。写真を見せられただけで迷わず即決したのだ。懸垂器具からぶら下がっている縄の輪が風で揺れるのを見上げながら、ぬるくてまじいお茶を飲んだ。急に涙が頬の表面を流れた。

「番茶が出がらしだから泣く奴があるか」

佐原さんは近視眼的に気を悪くしていた。それから「なんだか頭痛がする」と言い出し、一分も我慢せずに頓服薬を飲んだ。頭痛を治す薬を服用してから自殺するというのは、校正者としてさすがに許容できなかったのだろう。彼はその場で横になって瞼を閉じた。私も、今のうちにあのロープを外したいと思いつつ億劫でたまらず、三角座りの両膝を抱えて目をあけたまま突っ伏していた。見えない何かに頭を押さえられているみたいだった。

やがて、手枕てまくらをしていない方の手で佐原さんが私の足首を握った。ふと彼が本当に死んだような気がした。生きている彼は潔癖症で、他人の体に触らない。

「どうしたの」

体だけでなく舌の先までだるかったが私は精一杯訊いた。佐原さんは目を瞑つむったままでいた。でも彼が何かを——私たちを押さえつけているものを、見ているのはわかる。薄い眉毛の下、閉じた瞼まぶたの皮膚ははりつめている。

自分の右手で自分の左手に触れるのさえ億劫な、ひずんだ外圧を感じながら、私は彼の指をのろのろと外して脚立にのろのろ上った。ほどいた縄は自分のバッグに突っ込んだ。見ると佐原さんは、今度は脚立の脚を握っていた。相変わらず目を閉じているが、瞼からは力が少しぬけている。私は部屋中の窓を開けた。雨はやみ、濡れた細い路上に熱そうな光がおりている。「帰る」と言っただけは五分ほど商店街を散歩し、フェイントに戻ってみた。佐原さんは、急いでロープをくくりつけるでもな

く、さつきと同じ体勢でのびていた。私は靴を脱がずに片手でドアを開け放していた。晩春の大きな風が部屋を通って、カレンダーや鴨居に掛けられたハンガーのタオルや彼の黒い髪をゆらした。

「なんだよ」

「ちなみに」私は言った。「あなたの盗品じゃなくあなたと対等な立場に移動しようとして、恋人になったんだから、もう私のわがままをきく必要なんてないんだよ？」

そういうことはもつと早く言うように、と佐原さんは言った。

手作り市で室木むろぎと意気投合した黒ジャージの女、森瀬もりせはこの街に住み着いた。イーダ会に関心があると言い、佐原さんのアパートに顔を出すようになった。「苗字の呼び捨てでいいし」と彼女は誰に対しても気さくに言った。関西出身らしいが、故人である祖母がこちらの人だったという。八年勤めた会社が倒産したのを機に放浪の旅を始め、行く先々で知り合いと連絡を取り合ってボランティア活動などに参加してきたらしい。実際彼女は顔の広そうな人物で、たとえば佐原さんの部屋で車座の一部になっているときも、ここではないどこかにいる人たちとスマートフォンで繋がっている。その姿は重複と不足の印象を同時に与えた。旅の途中、祖母から相続した山がどんなものか一目見ておこうと思いついてこの街に立ち寄ったそうだ。目下、耕作放棄地の解消に向けたプロジェクトを手がけているNPOの知人と相談しつつ、一方で、近くの古い農家を民宿としてリノベーションできないか、過去にそういう実績がある仲間たちと検討中とのことだった。協力したいと申し出るイーダ会メンバーも少なからずいた。彼女もまた室木が主導する清掃活動に加わることがあった。

自殺未遂があつてから、生活費を運ぶ日以外にも抜き打ちで佐原さんを訪ねるようになった私は、しばしば森瀬と出くわした。おつまスコットさんや、彼女は私を見ると挨拶代わりにそう言う。最初は「違います」とむきになっていた私も、しまいには「夜から雨らしいね」などと

当たり障りのない挨拶で応じるようになった。

森瀬はイーダ会に、まるで以前からいたかのように馴染んだ。よりによつてあの佐原さんと似ているのも、その理由の一つだと思う。森瀬もまた、呪われているかのように一貫して極端に善人だった。迷い犬がいれば一軒一軒飼い主を尋ね歩く。川の中洲の柳に壊れた自転車が引つかかっていたら、腿ももまで水に浸かつて引き上げる。募金箱に目がない。そして、他人への無償の奉仕に携わっているはずなのに、他人への不条理な命令でも難なくこなせそうなその目つきにも、佐原さんの根拠のない威圧感と共通するものがある。

私の知る限りあれ以来佐原さんが自殺を図ることはない。元来、熾烈しちれつなまでに物持ちがよく、まだ使えるものはとことんリサイクルする人だ。自分の余生もその例外ではないと思ひ定めたのかもしれない。仕事や筋トレや、自分の住処にとどまらぬきりのない掃除や、食事や痼癩こらは今までどおりにこなしている。ただ以前と異なる点が一つあった。

それは彼が、永遠に死ねないでいる人のように見えることだ。

他人の命をこの世に引きとめたことの落ち着かなさを、私は初めて味わっている。

ある晩、街はずれの工場で大規模な火災が起こった。次々に集まっていく消防車のサイレンは高らかに鳴り続けた。両親とテレビを見ていた私は、リビングを出て、そのまま玄関も出た。あのアパートは類焼するような距離ではない。しかし足は歩き出していた。ヘリコプターが何台も飛来し、夜空一面から機械の音がした。これから野次馬になるらしき人々を大通りでちらほら見かけた。炎に照らされた、工場付近の建物の色と、絶え間なく立ち昇る嵩高かさたかい煙が、遠くに見えた。

アパートの鉄骨階段を上ると、外廊下の柵から身を乗り出しているセツの後ろ姿があった。彼女と会うのは久しぶりだ。

「やっぱりセツの言うとおりであった、佐原さんと私のこと」私は声をかけた。「そんなに見通せるなら、いつそ端まで見通してほしい。来週、来年、佐原さんと私はどうなってる？」

振り向いた彼女は「悪いけど、明日自分が宿酔かつかよになることしか透視できない」と笑った。「弱いくせにつきあっちゃってね」

促されて先に入った部屋には森瀬のほかにもう一人いた。道中の車酔いで正体を失い、室木と私に担ぎこまれるようにして佐原さんが入院見舞いに行った、内林うちばやしさんだ。春からまたこの街に戻っている。私が本人から直接訊いただけでもあれから二回、自傷している。こちらに気づくと彼女はにこにこして小さく手を振ってくれた。壁にもたれて座っている森瀬は、伸ばした足の上にも軽々としたノートパソコンを載せていた。卓袱台ちゃぶだいの赤いパソコンの画面も、さっきまでセツが使っていたらしく発光している。他に、高機能ゆえか旧いせいか重たそうな、室木の私物である一台も開かれている。奥の文机では佐原さんが、内林さんから手渡される用紙に赤鉛筆で書き入れている。今日は彼女が室木の代理をしているらしい。もし畳の上にビールやチューハイの空き缶が並んでいなければ、ごく小さいオフィスみたいな様相だ。耳まで赤くなっているセツのそばに座ると森瀬が顔を向けた。

「マスコットさんて、イーダ会のもんやのうて代表のもんなんやて？ 大変やろ、高校生の身の上で貢ぐのは」

この人が当たり前のように酒を持ち込むまで、イーダ会とアルコールが同時に視界に収まることはなかった。今は不在だが、飲むとなると室木はさらに強かった。私は言った。

「あのお金は佐原さんが稼いだものだよ。自分以外のために見境なく使っちゃうから、生きてられないから私が預かってるだけ。中途半端に知って中途半端に解釈しないで」

この人に対しては、きつい言葉で気持ちを表すことができた。私だけではない。彼女の前では誰もが、いつもより少しむきだしになる感じでした。そうしなければ彼女は、相手の発言を、自分に言われたものとして確定せず流してしまうからだ。彼女は決して根にもたず、何度でもあっさりとスタート地点に戻る。双六すごろくみたい。森瀬は佐原さんの背中に言った。

「気持ちはいやわかりますわ。あれでしょ、我慢できひんのでしょ。私も同じや。人のためにばっかりお金使うてしてもね」

「係り受けよろしいでしょうか」

校正中に話しかけられても、佐原さんは自分が書き込んである文字を声に出すことで遮るに留めた。

「私は煩惱が強すぎるんやわ」

『を』としますか？』

「そやけど、波に乗るようにそれにびたーっと即してしもたらええねん。逆らわへんこっちゃ。疲れるゆうのはどっかに余分な力が入ってるんや。代表、何かをこわがってはるんとちゃいますか？」

「森瀬、ちょっと黙っててあげて」

文机の脇から内林さんが言った。セツは短く内林さんを見て目を逸らした。森瀬は口をつぐみ、缶ビール片手に立ち上がって、その辺の座布団を踏んづけて佐原さんに近づいた。プルタブを開けたビールを佐原さんに勧めて内林さんに注意されると、彼の隣にしゃがんで自分で飲みながら、机の上を覗き込んだ。

『代表こんばんは』のやつか」

「見てくれてるの？」内林さんが佐原さんを挟んで尋ねた。

「知り合いの子も最近それ、してるみたいやわ。私けっこうあちこちでこの会のこと言うてるし。その子、日々の憂鬱を代表に送りつけるだけでちよつとすつきりするて言うてたで。代表はようできた穴やね。王様の耳は？」

森瀬は唐突にこちらを振り向き、私はやむを得ず「ロボの耳」と呟いた。「算用数字で統一しますか」という佐原さんの呟きを塗り潰すように、森瀬は言った。

「客観的に申し分ない環境にいたら、しんどいなんて周りの人には言いにくい。別にアドバイスがほしいわけでもないんやし」

消防車のサイレンが部屋を何度もまっすぐにつらぬいた。セツはガラスに深く水を満たした。佐原さんの手もとから校正済みの一枚を引き抜

いて森瀬は言った。

「私はそこにいますか」。最近このフレーズ、多くない？」

「前は一人の人が言ってたただけなんだけどね」セツが言った。

「でもこれって間違ってるやんな」

「どこが」

佐原さんはやっと会話をかみ合わせて、森瀬がもつ紙を覗き込んだ。彼女は「誤字やないですよ」と含み笑いで応じた。

「この人らは、『ここにいろ』という実感の少なさを、もうイーダの一部になってるせいやと、すり替えてるわけでしょ？ 単なる都合のいい錯覚や」

「私は、わからなくもないの」実際はここにいない人たちにそっと寄り添うような声で言ったのは、内林さんだった。「たとえ間違いであっても何らかの実感がほしくて、賭けずにいられないのよ。きつと」

「実感抜きには実感抜きならではのメリットもあるはずやのになあ。もつたいないわ」

「私帰るね。亜季はちゃんと送ってくから」

セツはいつのまにか水を飲み干していた。見えないけれど街はずれでは今も工場が燃えている。佐原さんもサイレンを聞くことしかできない大きな瑕疵。

「今日は泊まっていかがへんの」

森瀬は意外そうな声を出した。特に用がなくてもメンバーがここに集まってそれぞれの作業をし、面倒なら帰らないという慣習ができつつあるのか、と私は思った。そういうえば、こんな時間に唐突に来ても何も訊かれなかった。

「いちいち帰りますよ、私は」

「ああ、セツはもうここに泊まり飽きてるんやっただけ。あんたに去られた上、あんたが作った集団の中心に据えられるとはなあ。気の毒な人やで代表は」

そう言って森瀬はすぐそばの佐原さんの後頭部を二、三度撫でた。私

はあっと思ったが彼は大儀そうに白い手を払いのけただけだ。セツの手のひらに背中を押されて私は部屋を出た。彼をその場に置いていきたくなかった。けれどそこ以外に彼の家はない。

夜道に出ると、酔っていてもセツはしゃんとした背筋で歩幅の大きい歩き方をした。私は彼女に、佐原さんの息子の「誕生」から首吊り自殺未遂までの顛末について、話した。聞き終わるとセツは声を立てずに笑った。

「私も『何で死なないのか』ってあの人に訊いたことある。亜季とおんなじ。で、今の今まで、息子がどこかにいるって信じてたよ」

まだ笑えなかった私は、無表情で歩道の段差に躓いたりしていた。ふだんからあっさりした声音のセツだが、今は彼女自身少し意識しているように、とりわけさばさばと言った。

「さつき森瀬が、代表は何かをこわがってるんじゃないかって言ったでしょう」

「うん」

「当たってると思う。代表は、自分が慈悲に乗っ取られるのがこわいんだよ」

「慈悲って。一部の、見ず知らずの人が勝手にイメージを作っちゃってるだけ」

私の声は思いがけないほど上ずった。セツは横目に私を見たまま、これから自分が言うことをざっと点検するような間を置いて、言った。

「でもあまりに長く、『慈悲の表れ』と重複しすぎてると思わない？

最初と同じテンションで境界線を引き続けられるものかな？ 青いガラスと赤いガラスがたまたま重なってるだけだと頭では承知してても、目は紫色のガラスを映す。彼本人すら、赤の方だけ見ることはできない。彼というちゃちな一個人が、一つの状態に超えられ始めてる気がする。わがままな彼にとつては不愉快極まりない」

「超えられたら佐原さんはどうなるの。消えちゃうの」

「生きてるから、そう簡単に消えることができないから、だからこわい

んだよ」

呆れたのかセツの声はにわかによつきらぼうだったが、私が遠慮しうになると、再び私の背中を軽くたたいた。私は細く言った。

「慈悲という読みが、仮に的中しているとして、佐原さんは自覚しているのかな？ 何をおそれているのか、どうして不愉快なのか」

「代表自身はうすうす予測してたけど黙っていたことを、顔も知らない人たちから前ぶれもなく言い当てられた感じだったのかもしれない。代表に自覚がないなら、顔のないあの人たちは埋もれていた事実をぱっと照らした光みたいなものだよ。私が透視したわけじゃない」

工場の方角へ手繰り寄せられていく部屋着姿の野次馬たちと、時折すれちがった。

「いつか自分の子どもが生まれても、佐原さんほど思い入れできる自信がない」私は言った。

「私もだよ。だけどあの人にとって赤ん坊は、今ここにはないけど自分とつながってる、慈悲の出口だったのかもね。仮想出口」

でもそんな出口はどこにもなかった。あとは膨張するだけだ。有限な、生きている一人なのに。

六月は、黒っぽいブレザーであふれかえていた校舎の光景を、カッターシャツの白へ手際よく塗り替えた。前月の中間テストの理系科目で、今にも消えそうな点数を取り揃えた私は、やむを得ず勉学に励んだ。音楽の授業では無心にカステネットを鳴らして教師に褒められ、大規模な籤引きくしびでは校内イベントのスピーチを任された。沼男ぬまおはその後しばらく、がちがちで顔面蒼白の私の「開会の言葉」を物真似し、「ついには本物を超えた」と周りから評判を得るまでになった。チカと沼男はつきあい始めた。

紫陽花あじさいが中庭の一角をゆさゆさと占めるようになった頃、家庭科の授業で調理実習があった。無作為に四人ごとに分けられ、一つの班で四品を作る。私の担当した茶碗蒸しだけがいつまでも固まらないのはいかに

も決まりが悪かった。同じ班の一人から不自然になまなましい視線を注がれていると気づいたのは、自分たちの作ったものを昼食とする休み時間になってからだった。

私が見返すと彼はたちまちにやっと笑った。とても背が高く、顔にほくろが多い。

「おいしい？」

彼は尋ねた。私は彼が作った野菜炒めを口に運んだところだった。いいんじゃない、と私ほもそもそ言った。中三のとき、この人とは同じクラスだった。いつも高峯たかみねの取り巻きをしていた彼はゲームの標的にされることがなかった。私の髪を気儘きまじまに切った人たちの中でいちばん深く背中をかがめていた。お互いもちろん覚えていたが、口をきくことは今まで一度もなかった。他の班員である二人は、その二人だけでしゃべり続けた。

私の茶碗蒸しは何かが間違っていた。引け目から、後片付けに名乗り出た。排他的な二人は礼を言って実習室を出て行った。彼は残った。丸椅子に浅く腰掛け、調理台で頬杖をついていたらだと笑いながら言った。

「ごめんね。あれ」

彼の長い指が鋏はさみの形になり、散髪のジェスチャーをする。

「謝ってどうするの？」

私はスポンジの動きをとめた。彼は、無言でにやつきつづけていた。

「って私が答えたらどうするの」私は付け足した。

「あのときの勝見さんってさ、屑くずみたいだったよね。別に今はそう思っていないんだよ？ あんたって、特にいじめられやすい感じでもない。でも屑のときの勝見さんも忘れられないんだよね。映像として。だからあんたが全校生徒の前でスピーチしたりさ、クラスで人気のあるやつと仲良くしてるのを見ると、笑いそうになるときある。あんなに惨めだったくせに調子に乗ってんなあって」

「滑稽じゃない人生なんてあるの？」

キャッチフレーズみたいに口走ってしまった。考えてみれば、滑稽じ

やない人生は当然あるだろう。でもあのクラスにいたことがある人生に限定するなら、全員当てはまる。外はどんより曇っていて、灰色の中庭から紫陽花が浮き彫りになって見えた。彼が必ずしもそこまでにやにやしたわけではないと、私は知っていた。私だって実のところここまでむすっとした顔をしたわけではなかった。ただ、あの記憶と対応する表情の持ち合わせが私たちにはないのだ。

「俺のことも滑稽だと思おうわけ？」

「その程度のことでも自分の中にしまっておけずに、相手を傷つけてでも打ち明けるなんて、滑稽でしょう？」言っているうちに足がすくんでしまった。

「そんなじゃ同類ってことで、これからもよろしく」

彼はにやにやしたまま右手を差し出した。私は洗剤の泡がついた手を伸ばした。仕方のない、滑稽な握手だった。

野菜炒め係の男のせいで、午後の授業には身が入らなかったが、ホールルームに至ってようやく集中力が回復した。列ごとに配られるプリントを、私たちは前の席から後ろへと脇目もふらず回していく。このあとチカとアイスクリーム屋に行く私の腕は速い。その前に川原での古文テスト対策が挟まるわけだが、チカとすれば暗記も、スリルと透明感にみちた遊びだ。

土手からのびる、湾曲した坂道の途中で自転車の速度をゆるめると、アイスクリームの店頭販売の小窓からお姉さんが愛想笑いをしてくれる。寒い間は足が遠のいていた。私たちのポジションだった店の表は、部活帰りの中学生グループががやがやと陣取っていたから、中のテーブル席に着いた。チカは手首に、エスニック雑貨の店にありそうな麻紐のアクセサリーを嵌めていた。私は意外に思った。

「沼男から？」

私は指さした。先週彼女は十七歳になった。

「本見ながら自分で編んだんだよ。ヤスが誕生日にくれたのはこれと花

束」

沼男は本来は康男であった、と思いつながら、チカが取り出した『初級ロシア語会話』のページをあてもなくめくった。

「チカは国際関係学だし沼男はモスクワか。お似合いすぎる」

「ねえ、本気で言ってるんだよね？」

チカがめずらしく心もとなげな顔をした。「私から本気を取ったら何が残るっていうのよ」と本気で言ったが、「肩の力が抜けたいい女が残るかもね」と返され、残った私の方が高品質なので、少し混乱した。チカの表情はひんやりと曇っている。私はバナアイスを舐めるのを中断した。

おそらくチカは、私が佐原さんと心を通わせ合えていないのではないかと勘繰っている。それは事実だ。通う以前の問題として、佐原さんの心を探すのは川底の泥を篩にかける砂金採りのように手間がかかるし、一か八かだ。ただしチカが、そう勘繰りながら沼男と自分が完結した関係になったのを、「亜季の目の前で非常階段の扉を勢いよく閉めたみたいだ」と思っているのなら、それは間違いだ。私は言った。

「私はチカと沼男が一緒にいるのを見るのが本当に好きだよ。あのさ、むかし父が歌舞伎に凝って、連れられて行ったことがあるんだ。花吹雪がえんえんと散る舞台の真ん中で、物凄く綺麗な女形の人が一人で踊ってたね。思いがけず魅入られてしまった。すでに目の前にあるのに、感覚としては切望に似てた。この完全さが永遠にあってほしいっていう。そのこと、何年も忘れてたんだけど、こないだ生徒も結構いる階段のところで、チカと沼男がふざけて抱きあってたでしょう。あのとき思い出した」

私は、溶けて手の甲を伝い落ちてきたバナアイスを口でとめた。店先の中学生の群れは底抜けに騒がしかった。チカはつられたようにちよつと笑ってから言った。

「あの人、会話習ってる先生の話するとき、亜季が教えてくれたんだっていつも言うよ」

短い、くっきりした重量のある悲しみが、頭の中を川みたいに流れてはっとした。幸い先頭と最後尾のある川だったから、「そのうちロシア語で言うようになるんじゃない」と私もすぐに笑って言った。店の内装は、ところどころがうやむやにごまかされているようなこの街の雰囲気遮断するように、白と芥子色と黒できりっと統一されていた。少しでも油断したら滲んでしまうのだとでも言いたげに。側頭と右肩とを壁にもたせかけて、チカは訊いた。

「こないだヤスともちよつと話してただけだし。史乃しと亜季あって結局何があったの？ 最近はふつうに喋るようになったんだね」

「うん。それ自体がふつうじゃないっていう点は譲れないけど」

チカは頭と肩を壁から離れた。コーンを巻いていた包み紙を蛇腹に折り畳みながら私は言った。

「中三のとき、いじめにどこまで似せられるかっていうゲームがクラスで流行って。ターゲットは決められた順に入れ替わるんだけど、私が当番のとき、次の人に回さなかったの。それが史乃だった」

「仲が良かったんだね」

「いや、史乃をじゃなく、自分の、持ちたてのモトローを守るためだけにしたことなの。史乃は史乃で、こういうゲームに巻き込まれたのも自分のたちの責任なんだからと、代償を払うつもりだったらしい」

「亜季に妨害された気持ちでも、客観的には助けられた格好だったわけか」

「その鬱屈が、私がいつときかなり上級のおぎなりになってたときに噴出したってこと」

蛇腹の紙を立て、弾力のないバネのように指で押さえて私は言った。あの「和解」は、イーダ会に入った史乃が自分と折り合いをつけたためだろうと、チカに話していいのだろうか。まだ会員たちの集まりで史乃と直接顔を合わせたことはない。迷って顔を上げると、なぜか鏡のように、チカも何かを迷う表情を浮かべていた。

「その鬱屈だけじゃないかも。昔、石崎美術館に泥棒が入った話、知っ

てる？」

思わず、突きつけるような視線をチカに向けた。彼女はつづけた。

「盗まれた作品って焼き物だったらしいんだけど。黒井澄華くろい ちようかっていう陶芸家の」

「地元の出身者なんだってね」 やっと私は口を動かした。

「そう。みんな案外知らないけど、史乃の曾祖父にあたる人なんだよ」

「え？」

「それでね、」彼女は軽く辺りを見回した。「盗まれた作品は、史乃のお父さんによる、贋作がんさく」

チカの説明はこのようなものだった。

あの『無題V』は、長年行方不明だったがめぐりめぐって史乃の父親のもとに戻り、黒井澄華のコレクターである石崎の先代に買い取られた。そういう話になっているが、実は『無題V』はそもそも存在しない。史乃の父親は自分の祖父から直接聞いてそのことを知っていた。何かの手違いでそこだけナンバーがとんでいたのだ。史乃の父親は石崎の現当主とかねてより確執があった。自分たちは特別だと信じ込んでいる、あの旧家の人々の審美眼を試すために、それらしいものをひそかに作り、欺いた。彼自身は会社員だが、祖父や父から学んだ陶芸の技術は高度だった。先代はこれを展示せず生涯手もとに置いていたから一般の目に触れることはなかった。しかし先代は亡くなり、現当主は美術館に展示した。事情を知っていた史乃の母親はそのせいでひどく憔悴した時期があった。盗まれたときはむしろほっとしたという。

「あれ、史乃の両親って離婚したんじゃないかって」 私は言った。

「家を出る前にお母さんが史乃に知らせておいたんだって。万一ばれたときのショックを軽くするためじゃない？」

そこまで話すと、チカは息を長く吸って長く吐いた。私は席を立ってセルフサービスの水を二杯汲んできた。チカはありがとうと言ったが、テーブル上のグラスが見えていないような目をしていた。

「チカは史乃と中学が違ったのに、よく知ってるね」

「一時期、塾が同じだったんだよね。中学に入ったばかりの当時は史乃って引つ込み思案で、塾では私しか喋り相手がいなかったと思う。史乃は、それこそ見返りを渡すみたくに、私にその秘密を打ち明けたの。私は仲の良い子とか紹介するようになって、史乃も物怖じせず喋る子になった。でもあの秘密は重かったな。一生口外するつもりなかったけど、さっきの亜季の話聞いたら、ひよっとして父親の贖作のことがあるから余計、過敏になってるんじゃないかと思えて。史乃が心配になった。今も全然終わってないんじゃないかって」

「代償を払えなかった、ということだよね」

贖作は、断罪されたわけでも許されたわけでもなく、盗難という異常な経緯で消えた。手品みたいに。盗まれている限り、見破られることは今後もない。

「だから史乃は、中三の『ゲーム』のときはせめて自分で自分の責任をとろうと、人一倍思ってたのか」

私が続けると、チカは首を傾げて考え込み、その角度のまま口をひらいた。

「だけど、じゃあ史乃は、いっそ贖作の真相がばれちゃえばいいと思ってるってこと？」

高峯の考案したゲームでは、優れたところは傷つけられ、隠したいことは暴かれて攻撃された。自分の中から無理やり秘密を持ち出されてしまうにはうってつけの機会、それを私が壊したのだろうか？

「まあ、さすがにそれはないよね。あんなのは一度きりのことで、もう穏やかに暮らしてるお父さんを、中傷にさらしたくないだろうし」チカは言った。

「うん」私はチカとは別の理由で同意した。「史乃は今さら、裁かれて謝罪してすつきりしたいとは思ってない。観客席を立って、手品の舞台の側に就きたいんだもの」

チカはわずかに目を細めて私を一瞥した。ようやく水を飲んでいる。

〈続く〉

牧田真有子(まぎた・まゆこ)
80年生。「椅子」で「文学界」新人賞奨励賞を受けデビュー。人が抱く寄る辺なさと、世界が孕む不確かさを、丁寧にすくいあげ描きとる。主な作品に「夏草無言電話」、「群像」09年5月号、「予言残像」(「群像」10年6月号)、「今どこ?」(「WB」20号)、「合図」(「早稲田文学記録増刊 震災とフィクションの「距離」)、「動物園の絵」(「早稲田文学」⑥)など。

早稲田文学・オン・ウェブ

copyright by Makita Mayuko 2014

published by wasedabungaku 2014